「八重山古陶」展 関連文化講座
なぞの多い湧田焼　もの作りの視点から考える

講師：大嶺實清氏
日時：平成１９年７月３１日（火）
場所：那覇市立壺屋焼物博物館３階図書講座室

いつも物を作っていながら思いますけど、物作る原動力と言いますか、エネルギーみたいなものは感動から始まっているような気がします。感動するものに出合った時、奮い立ちますね。それを繰り返してとうとうこの歳になりましけど、自分自身を語るしかないので、研究家でもなんでもないので、非常に申し訳ないですけども、過去からいろいろ見てきたこと、つまり八重山との係わりとか、焼物との係わりの中で感じたことを今日は雑談めいたところでご勘弁願います。

僕は二十歳代の頃までは、まさか焼物をやるとは思っていませんでした。絵とかそう言うもの、文学も含めてそう言うものが非常に好きでした。ところが或る日、突然おかしなフォルム、「何だこれは？」と言うフォルムに出合って、開眼されたような気がします。それがたまたま琉球南蛮だったのです。「えっ！」と思いました。僕はヤンバルの田舎に生まれましたけれど、廃藩の頃の落武者達ですよ。泊の製塩業、塩炊きの技術を持ってヤンバルに下りた先祖です。まさか焼物に係るとは思わなかったけれど、出会いましたね。そして、暫くするとまた、「これ何だろう？」と言うものに出会いました。これがパナリ焼のフォルムでした。なんだか解らないけれど、大好きでしたね。友人が持っていて、通って通ってそれを見せてもらいました。その頃から八重山で焼かれたものだと言うことが解ってきて、八重山への思いが強くなりました。そして丁度1970年代、僕は首里に最初窯を造ったんです。とうとう堪らなくなって。若さの至りでしょうね。何かエネルギーが有り余っていたのかも知れないです。首里に窯を造った前後に、パナリへ渡りました。そのパナリとの出会いで、八重山と言うものが非常に濃く見えて来たような気がします。帰りしな石垣あたりに、あの頃丁度70年代と言うと、沖縄の骨董ブームだったんです。しまいには墓荒らしまで始まった時代です。70年から80年手前まで。およそ7・8年、まあ10年位と見たほうがいいですね。骨董ブームでした。とにかく石垣あたりの物を集めている人達の所へ寄っては見せてもらって、次第に物が見えてきたと言うか、ああこれは何だと言うことが。そういう風な繰返しを80年代までずっと続けまし

た。その中でパナリの他に、今日展示しているような釉薬が掛ったものとか、重たいものとか、それから土味の非常にいい、あの頃は宮良焼とか言って呼んでいたのですが。ここで言う無釉の、つまり荒焼と呼ばれている焼物が大好きでした。そして帰りに海岸べりを通っていたら、口辺部、つまり口だけがどっと見えているんですよ。「あれ、これ何だろう？」と蹴飛ばそうとしたら動かないんです。それで、漁ってみたらでっかいやつが出てきました。そういう出会いが散々二十歳代にありました。今思うと、ちょっと記録でもしておいたらすごく良かったのにと思うくらい、骨董ブームで物が出てきていました。これは本島でもそうだし、八重山でもそうなんです。一杯出ていました。それで今日話題になりそうな、八重山でも湧田系の焼物が焼かれていたのかと言う、僕の中でこれは仮説ですけど。こうして八重山でも焼かれていたと、ある程度答えを出して今日も展示をしていますね、こんなマカイ（碗）ですけど。湧田系のマカイとは上向きにサッと開いた、そして見込と言う底の径が非常に大きいかなり広めのマカイです。後でそれにも僕は出会うんです、「えーっ！これ何だろう？」と。それで調べていったら湧田系、湧田焼と言われている物だと言うことが解りました。そして、湧田とはどこだろうと追跡したら、今の県庁あたり、壺川から国場のあたりまで含めて昔は湧田地方と呼んでいます。そこらあたりで外来の陶工達が来て窯をやっていたんだと。それを湧田焼と言うんだと先輩たちの説明だったんです。それで、あの頃からこういう物がどういう経路で入って、沖縄に着いて沖縄の物として使われていたのかと。それがずっと後なんです、今みたいにちゃんと化粧されて絵付けもされている焼物は。今日一番話題になる仲村渠致元と言う人、那覇の壺屋が1682年とされているからその辺を基準に、そのちょっと先に平田典通とか、琉球の正史にちゃんと記録が残っている人達の名前があるんです。僕が今言っている湧田焼と言うイメージは、もっと前のイメージでずっと考えていました。湧田に行って壺屋に統合される以前どういう焼物があったのか。これは今もそうなんだけれど、物作りは需要と供給で主に成り立っているんです。需要のないものは消えますよ。だから、当時どういう需要で湧田マカイが焼かれていたのかと言うことをすごく考えるんです。今は作家が物を作る時代と言われているから、そう言うことはあまり関係なしに得て勝手に造形しますね。そうではなくて、あの当時というのは恐らく産業としての位置づけ、王府は今で言う一大プロジェクト、それを汲んで壺屋に窯を統合し、それから留学生も送ったりして琉球の一大産業プロジェクトとして当時焼物を進めていたと思われる。そういう中で、この湧田焼と呼ばれている外来の陶工から始まると言われているんですけれども、それがどのような形で平田典通とか、初期壺屋にどのように受け継がれていくのかがすごく課題なんです。年中そんなことを考えて、それくらい湧田のマカイと言うのは僕の中では良いマカイです。鉢に使っても良いし、首里のころからこれを作り出したんです。かなり量も作って、小さな個展で鎌倉とか秋田あたりにも行っています。それから富山あたりでも何回かやりました。茶人たちにも非常に好まれます。換茶碗くらいには使えるとか言って。しかも、湧田のマカイの場合はすごくシンプルですね、仕事そのものが。土で作

って、化粧とかない時代ですからお化粧もしていない。ない時代と言うよりも、福建から南側の仕事だと僕は見ているんですけれど。景徳鎮とか北の方はいち早く化粧もやられているんです。素地、つまり作ってこの素地に直掛けされている仕事です。釉掛けと言う点でもすごくシンプルです。実は僕が惹かれているのは、釉薬よりも形です。そして手に取って使う感触がすごく良いと受け取っているんで。そういう良い物がどういう経路で沖縄に入ってきて、そしてここで成長してきたのか。そしてそれが今日の展示会で、八重山でも焼かれていたんだというきっかけを作っている。僕が日頃考えていた仮説みたいなものが、何かその辺でそういう風になるのかなと今思ったりして、今日感慨深く展示会を見てきたんです。八重山も湧田系の物が焼かれていたんだと、はっきり展示もしているので嬉しくもなるんですけれど。でも、まだだいぶ疑問が残ります。焼物を見る場合に一番正確なのは、窯跡を調査して窯から出た陶片、これがもうはっきりこれだと答えが出るんですね。そうでもない伝世品とか、どこかで拾った陶片とかでは、なかなか何処産とは言いにくいですね。仕方なく皆言っていると思うけれども、間違いも一杯あるみたいですね。僕自身も解らないときは、この辺じゃないかとよく言ったりしますけれども。窯跡から出たと言う物が割と沖縄の場合少ないんです。これはいろいろ理由もあるんでしょう。考古学的な見地から、例えば県あたりが予算も掛けてということが非常に希薄だった、弱かったんでしょうね。だからせっかくあったのに、それがあまり調査されていない。例えば古我知焼ってありますよね。あれなんか僕の高校の頃なんか、パイナップルブームが来てその時点で窯を全部ひっくり返したんです。畑になったんです。それを憶えているんです。窯の形もこれが焼物の窯の跡だったよと憶えています。あの頃今みたいに調査が入ってやっていれば、もっとはっきりしたでしょうね。これはどこの窯でも言えるんですよ、八重山でも本島でも。ついこの間、明治ちょっとあの辺のことでもはっきりしないくらいだと思うんです。そういうこともあって今非常に混乱しているようで、何処やる何処やると言うのは。これは八重山である、そうでないと。プロに近い人達皆今そういう風に混乱期にあるんです。そういうことを考えると、物を作る視点から感じたことを言うのもいいのかなと思って話しているんですけど。湧田系ですけど、仲村渠致元と言うのは家譜からいろいろ専門の人達が調べていることからすると、湧田系の陶工であったということが言われている。つまり、上手物の方の陶工と言うか。王府はですね、僕自身の中でもちょっと誤解があったのは、壺屋の南ヌ窯、東ヌ窯がありますね。南ヌ窯は荒焼と言われていますね。東ヌ窯は上焼なんですよね。それを混同して分けて考えていたんです。ところが王府としては、荒焼を主体に一大プロジェクトだったということが、ようやく何か産業の立場から考えると、これが当たり前なんです。だから後に荒焼の人達がすごく経済的に良くて壺屋のカーミー達と言われるのは、皆荒焼の大工さんたちだったと見られていますね。一方では上焼貧乏と言う言葉があって、上焼の方は何かちょっと軽く重みがない感じで受け取っていたんですけど。それはそうではなく王府の力の入れ方みたいな、特に上手物と言うのは交易品、つまり琉球時代と言われている約 300 年、14・15・

16世紀。薩摩が入ってくるのが17世紀の初め、1609年。薩摩が入って来る以前交易品で満ち満ちていたと言う記録もあるので、相当南方系・中国系の焼物が琉球には入ってきたんです。僕は感動の話を最初にやったんだけども、僕自身も感動を受けたのは、その頃に入って来たものが沖縄の巷、つまり田舎の納屋とか台所で使われたり、寝て使われずにあった。それに出会った。それが1970年代の骨董ブームの出会いなんです。一杯ありました。本当に一杯と言った表現がいいですね。亡くなった山里永吉さんとか、当時はしたたかコレクション熱の強い先輩達がおられたね。その人達が一杯コレクションして持っておられたね。これが1970年から1980年代の頃。そして同じように八重山でもコレクターが一杯いて、持ってる人に見せてもらったりしました。そういう時代が沖縄に一杯あったということ。今考えると本当に仕事したなと、あの頃物書きでもあって、いろいろ調査をやっているともっと資料もはっきり出てきたと思うんだけど。そこでですね、湧田系のマカイが初期壺屋、壺屋の最初の頃にどのように被さって、繋げられていったのか、仲村渠致元あたりに。仲村渠致元と出てくるけれども、恐らく致元だけではなくて、周辺にはいろいろな陶工たちが一杯いたと思うんです。王府に目をつけられたのが、たまたま仲村渠致元だと思います。王府は産業を興すのにそう言う人たちをうんと起用している。それで王命で留学もさせたり。役人達も付けて、恐らく他の陶工達も付けて八重山あたりにも行っていると思うんです。上焼の系統だから、つまり湧田系の出だから上焼だけをさせようというのではなく、恐らく喜名系・知花系そう言う陶工も含めて一大プロジェクトとして、産業として王府は捉えていたと思った方が、非常に解りいいのではないかと思います。そしてたまたまこれは何か焼締め系の仕事だと分けて考えて来たけれども、そうではなく、当時は一大プロジェクト、上焼も一つになってどのような産業を興すのか躍起になった時代だったのではないかという気がします。そしてひとつ非常に不思議なことがあるんです。湧田系の鉄絵が差され、これも見事なんだけども。たまたまこの鉄絵の入ったすごく品のある、あれだけのマカイは今の陶工ではちょっと挽けないじゃないかと僕は思ったね。挽いていていつもそれを感じます、何だろうって。それ位の物が宮古から一杯出たんです。これが不思議ですね。あの頃の流通、つまり産業の流れを考えると、本島で作った物が宮古に渡ったのか、八重山で作られた物が宮古に渡ったのか。そう言ういろいろな思いが交差します。その辺をこれから突き止めて行きたい。もし八重山で焼かれていたとすると、仲村渠致元あたりが行って始めたのではなくて、八重山の産業を振興したんですよ。前々から窯はあるわけなんです。ところが振興したということで捉えると、良いものが向こうで出来ていても当たり前、おかしくない、そういう感じですね。そうすると本島で作られた物が宮古あたりに渡って行ったのか、それがはっきり見えてくるのではないか。そしてもう一つの決め手は、宮古のサンゴ礁、テーブルサンゴでできたお墓があるんです。あの中に無縁墓みたいになったものを何基か見たことがあるんです。若い頃ですから平気で見に行こうと言って見に行ったんです。中に一杯入ってました、副葬品として。そういうものが沢山出て来たんでしょう。良いと思ったもの

が殆どそういう風に埋葬された物。副葬品をお寺から2・3点貰った覚えがあるんですけど。そうすると、仲村渠致元とか平田典通、つまり壺屋が1682年ですよね。その以前にどういう焼物があったかということを考えると、もう湧田しかないです中国系の。それも王府との関係も恐らく居ついたと思います。県庁を作った時もいくつか窯が発掘されたんです湧田系の。ところがそこからは、100年、50年その辺の違いあると思うんでちょっとはっきり言えないんだけど、湧田のマカイは殆ど出なかったですね。瓦とかそういうものしか出なかったね。唯一湧田系が沖縄で発掘されたのは、僕はあの頃まで商業高校にいたんですけど、友人から電話がかかってきて出たよって言うから、壺川にオキコがあった時代です、そこの何かの工事で出ていたんです。捨て場か窯場かの確認は出来なかったけれど、若干拾ったものが今の県博に資料として入ってます。明らかに湧田系のマカイです。学芸員が古我地で発掘されるものと違いを形態で調べようとか、いろんな試みをやているけれど、形態だけでは難しいんです。ただ、古我地と湧田の関係で言うと、土は南部層にはないんです。殆ど北部圏の土なんです。だから昔からヤンバル船みたいな、そのもっと前はどんな船か知らないけれど、船で運ばれている可能性が強いです、原料の土は。それからすると古我地で出る湧田系のものは、ここから陶工が行って作ったのか、元々あそこにも中国系の陶工が入っていてやったのか、その辺のことも非常に不明です。とにかく土はないですよここには。南部層というのは、クチャって与那原あたりに一杯あるでしょ、クチャを母岩みたいに考えるとそれの風化物なんですよ。クチャの風化物というのは、ここでよく言う島尻マージというのがありますよね。それからジャーガル。こういうものが風雨に打たれて流れていって低い所に堆積してできる。そういう土はいっぱいあるんだけれども、那覇の与儀公園、そこらあたりは昔は皆田圃なんです。ジャーガルの堆積土なんです。それを辿っていくとクチャの山がいっぱいあるんです。そういう風にして土は出来ています。そういう土は南部にいっぱいあるけれど、鉄分の少ない湧田に使われているような土は、殆ど出てこないです。県庁で（発掘調査）やった時にちょっと黄色っぽいなと思う土が出たけれど、焼いてみたんですけど古我地マカイの肌にはならない。だから殆ど土は北部から運んでいる可能性がある。そしてもう一つは、八重山とこうして関連して考えると、八重山には土が一杯あるんです。だいたい八重山の土っていうのは、於茂登岳ってあるでしょ。あの於茂登岳って言うのは、母岩が花崗岩なんです。その母岩の花崗岩が風化して、その風化物があの辺の土なんです。その風化物というのは白土。沖縄でよく赤土、白土って言う、白土がいっぱいあるんです。それをもっと詳しく見ると、珪石、長石と三拍子揃ってあるんです。何でもあると言って良いくらい。土の条件で言うと、本島よりはるかに八重山の方がいいですよ。平田典通にしても、仲村渠致元にしても、土調査をうんとやっているんです。よくその気持ちは分かるんだけど、焼物は土が分からないとだめなんですよ。土調査の記録もいっぱいあるので、分かっていたと思うんです。もし本当に分かって八重山に王府が彼を仕向けているんだったら、王府も偉いです。産業を興せたわけなんです。今でもそれは間違いなく興せるんです。それくら

い土という条件では、八重山はすごいです。だから致元あたりがいい技術を持って向こうで 3 年くらい居て、周辺の連中は残っている人達がいっぱい居るから、或いは地元の人達も含めて、腕を鍛えていけばいいものが出来るんです。それが 18 世紀頃に花咲いたということだと思います。本島でも 18 世紀に花咲いているんだけれども。そういう人々の、王府の財力が裏にあって、産業としての位置付けがきっちとやられている時代と僕は見ています。その時代はすごく良いものが出来ているんです。それがいつか観宝堂が浦添美術館で「沖縄の古陶展」やったでしょ。あれが一つの証明になりましたね。あれは 18 世紀を選んだのではないですよ。良いものを何十年かかって、骨董屋を通して出たものを追跡したんです。良いものはあっちこっちチェックして、集めた結果殆ど 18 世紀。これは今言ったように、典通、致元のあの流れの中で王府と一緒になって産業興しをやった一つの結果だと思います。それが 18 世紀に花咲いたんです。県庁の役人達に僕はたまに言うんです。あの頃は王府がやったので、今税金使って県がやればいいじゃないか、国の金も動かしてそういう産業興しを、工芸産業、焼物興しをやればいいじゃないかと言いたいぐらいです。一向にやらないですね。全くやらないですね。もう最近僕なんかも歳くったので、あまり言わなくなりました。半分諦めました。でも諦めません。次の世代にやれる時代が来るような気がします。今、スローフードとか、自然を大事にしようとかいろいろある時代だから、いつかそういう時代がまた来てもおかしくない。特に日本は、和食と言う食文化を持っているで、その和食がきちっと伝えられて、その和食と焼物は表裏一体なんです。和食の美、つまり極めというのは焼物の極めと一つなんです。そういう文化を歴史的に持っているので、可能性としてはあると思います。（話が）変な所にいったんだけど、そういう風に考えると八重山で湧田系の焼物が致元あたり、その周辺の陶工達が仮にやったとしたらこれは面白いですね。産業が興っているんですよ。それが仮に、これ仮説ですよ。本島から運ぶより八重山から運ぶ方がいいのかも。今は飛行機でも行ける時代だからそれが見えないけれど。当時離島というのは大変なんです、船で行き来するということは。それを考えた時に、当然八重山で興った産業が、出来た物が宮古に運ばれてもおかしくはない。それがたまたま、宮古のあの古いテーブルサンゴのお墓の時代に。あのお墓を気にするのは、僕はあの時代を気にしているんです。あの時代に一杯副葬品として入っていたということが、すごく面白いです。これを誰かが解き明かしてもらいたいですね。だから学芸員もこういう所ばっかりにいないで、そういう調査もやってほしいんです。沖縄の可能性の一つですから。一大産業を興せるんです。それくらい感じのいい食器ですね物が。現代の目から見ても、あの鉄絵も。あの鉄と言うのは、二酸化鉄を材料的に言うんだけども。本島で出るマンガン、これでも鉄絵は出来るんですよ。鉄分のパーセンテージが違うだけで。マンガンだけでやって、上から透明釉を掛けると鉄絵になんです。そんなことからすると、八重山の方が優れている。木節（キブシ）という土があるんだけど、その木節も、沖縄本島にも古我地の近くにビーマタ（為又）と呼んでいる土がある。ちょっと木節に近いんだけど。純然たる木節が八重山にはあるんです。灰色の土なんですけど。

その木節の隣には必ず鬼板が層になって、鉄分が固まっているんです。何千年、何万年の間に花崗岩が風化分離して、鉄は鉄、白は白でそれが隣一帯であるんです。厚いのでは 4・5 ㎝もあるんです。ところが普通1・2㎝くらいの薄い層なんです。これを鬼板と呼ぶ。ここではコーイルーとも呼ぶ、マンガンも含めて。そういうもので鉄絵をやる。鉄絵の運筆、筆跡すごいです。これは今日の展示にもいくつか入れてますね。どう見てもあの絵は、未熟な人達ではないような気がします。写しをしている、運筆が良いですね。相当鍛えられている人達が、あの頃から絵師とかいろいろあったのか僕は分からないけれど、それに近い形ですごく鍛えられた人達が絵付けもしていますね。真似て僕なんかもよくやったりするけど、なかなか絵にはならないです。それくらい品が良いと言うか、もの自体が。もちろん中には素人に近い初期陶工達が作ったのもあると思います。「えーっ！」と思うのもあるけれど、中には秀品がある。これはどこの博物館に持って行って展示しても、まずすごいんじゃないかな。亡くなった考古学者に三上次男さんていますね。彼なんかも僕が首里に窯を始めたころよく出入りしてもらったんだけど。ある日僕の工房のこういう物を見て、「えっ！これ中国だな」と言って見てました。それくらいああいう人達が見ても品がありますね。僕なんか品があるのが好きだから、美しいものは大好きなんです。感動というのは皆その辺なんですよ。感動しないものは、どんなに有名な人が作っても僕はあまり興味ないですね。今、湧田の良い物というのが仮にあったら、いいですね。文句無しですね。これ、物作りの世界で誰に見せてもおかしくない。それくらい感じますね。復帰記念事業で濱田庄司が監修した、『沖縄の陶器』というこんな分厚い本がありますよね。あの中に最初に何点か出てくる、あれも秀品です。あれは益子参考館に収まってます。そのあと調査で我々も行って見たりしたんだけど、すごいですね。見込みの広さとか、高台が割りと広いですよ。だから鉢にも使える、碗としてももちろん使える。もってこいの器ですね。和食にすごく適しています。鎌倉あたりに持っていくと、すごく喜ばれます。今作ったものでも。だから、あれぐら良い物が仮に今作れたら、これだけでも勝負できます。八重山の物を、向こうではあまりいいものは出来ていないのかなと思っていた自分が、次第に皮が剥けて、いやいやこれはすごいと、八重山をうんと見直すようになりました。物はうんと多く見て、何度も何度も見ることがその物を見抜く力になるんです。どんなに頭の中だけで観念的に研究しても、物のよさというのはなかなか見えないのではないかと思います。だからあっちこっちにある良い物を多く見て、特に良い物を見て、悪い物は見ない方がいいと言われてます。資料というものは。悪い物ばかり集めて使っていると、良いものが見えなくなるみたいです。だから逆に、良い物をどんどん見ていたら、悪い物も見えるようになるんです。子ども達はまだ良い物が分からないからと言って、「ウレータカサンドー、さわるな」と、これは大間違いです。子どもの頃から良い物を、それを見せて感性を養わないとやっぱり需要というのが出てこない。芸術家が物を作るということは、これはもうほっといていい。これは勝手にやります作家が。ところが日用食器とか、日常の物というのは産業で捉えないと物は良くならない。産業ということ

は何かと言うと、需要と供給なんです。どういうものが需要としてあるのかということ、その需要に応えきれない産業というのは潰れます。どんなに伝統でも。だから、しっかり目を肥やす人達をまず増やす。子ども達には積極的に良い物を使ってもらって、目を肥やしてもらって、それが青年になり大人になった頃は、すごく需要が高まると思います。教育改革とか色々言うけれど、ああいう改革だけでは、今言うような需要というのは僕は日本から消えるんじゃないかと危惧しています。危ういと思います。そういう教育はしてないですね。良い物がどうして見えるのか、良い物とは何かという話を少しさせてください。首里の窯（作った年）が 1970 年代なんです。そして 10 年くらい居て読谷に移って約 30 年経ちました。この 30 年とか 40 年の経過の中で、ひとつ感じているのは、今僕の工房に買い物に来るお客さんは、首里でお付き合いして一緒に育ったお母さん・お父さんの子ども達の時代になっています。「えっ！あのお父さん、お母さんの子ね」という人達が今ものを買い漁る時代になりました。だから、自画自賛じゃないけれども、一緒に育って来てるんだなあと感謝してます。親というのはそういう何か責任があるような気がします。ただヤチムングヮー程度に思わないで、やっぱりいいものを常に求めてやっと 3・40 年では、だって致元の話なども、正式には 80 年くらいで 18 世紀にあの結果を出しているんです。だから、100年努力するということは、すごいことなんですよ。1 世紀の内に 3 世代くらいあるのかな。自分の世代を責任を持って、そういう良い物を使っていくということをやると、100 年待たないです。それがあの時代のような気がします。それも、王府も一緒になってやっているんです。ただ、僕は王府が南ヌ窯だけを作ったと今まで思っていたけど、途中から、待てよこれは違う、王府はそんなことやらない。一大プロジェクト、産業興しを始めたと。薩摩が来てから後、交易品が下火になって、外から入ってくるものよりは、作らざるを得なくなったんですね。その時に平田典通、致元とかその他一杯、王府が目を付けて一緒に奮い立ったんだと思います。だからそういう意味では、初期壺屋というのは良き時代なんです。それを学ばずして、焼物はないような気がします。初期壺屋大好きですね。その流れの中に、今日の展示の八重山の焼物もあるわけです。そういう風に考えると、八重山のものがこれからもっともっと発掘されて、分かってくるんじゃないですかね。と言うのは、土が良いんです。焼物の原料としては、沖縄で八重山が（一番）。あの於茂登岳の周辺は全部土なんです。川平湾は水が綺麗と皆よく言うでしょ。濁らないですよ。あれ何でかご存じですか。何時行っても水が綺麗ですよ。あれはバックに於茂登岳のあの風化物、つまり珪砂、珪素分の砂、90何パーセント珪砂ですよあれは。上流の方は溜まっている砂。だから明治の頃にこれを材料にして、焼物をやろうとした試みもあったと言われています。珪砂なんです、手ですくうと 90 パーセント、99 パーセント珪砂、いい所になると。まあ、溜まりの所はちょっと泥分も溜まっていますけど。その珪砂があるということは、バックに長石、珪石、よく言う木節、白土が一杯あるんです。ただ、耐火度の高いメーガニクー（前兼久）というのが、まだ向こうで良い層はあまり見つかっていない。だから、八重山のものが重いというのは、ただ下手で重いのではなく

て、ロクロ挽きが下手だから、まあそれもあるけれども。中には秀品があるとあれだけ重いんですよ。それにメーガニクというカオリン系の土があるんですけど、それを本島では昔から混ぜています。壺屋にマカイ土の調合法と言うのが、僕はあの亡くなられた小橋川さんから聞いてメモしたものがあるんですけど。それにナカドゥマイ（仲泊）という言葉が入ってるんです。そしてメーガニクが入ってるんです。クチャという言葉があるけれど、それはちょっと理解できないです。何をクチャとあの辺で呼んでいるのか。お年寄りに聞くけれども、ちょっと不明です。南部で言うクチャじゃないと思う。クチャと言うのは低下度だから、低いんですよ温度が。クチャを混ぜたら、そんなに高火度で焼かれてないからクチャを若干混ぜたのかなと思ってやったりするんだけど、どうもクチャじゃないような気がしますね。そういう風に、昔は職人気質と言うんですけども、職人と言うのが、土から一貫してそういう技術を身に付けている。その時代は良い物が出来てますね。今はメーカー物を使うから土が分からなくても、焼物は出来るんです。メーカーに電話すれば何でも入ってくる。便利と言えば便利なんだけど、恐らくいいものにはならないかも知れない。あの頃はそうではなくて、土一つにしてもちゃんと図式があるんです。そして長年繰り返しやる内に、良い物が出来ていってる。だから、18 世紀のマカイ資料見たり、持ってもいるけど、見事な土です。あれだけ分厚く挽いているけれど、軽いです。あれはメーガニクと言う、だいたい本島の今の仲泊あたりから、最初は前兼久から船で運んでいたんです、伝馬船で。船にちゃんと一坪の板枠を作って、その一杯いくらで崇元寺あたりに下ろしたと言われています。僕が読谷に移った時期までは、80、90（歳）くらいの、土を運んだお年寄りが仲泊にはいっぱいいました。その人達の聞き取りもやったことがあるけど、明らかに運んでいますね。それじゃ、壺屋は何でこんなことしたんだろうと言うと、王府の経済立地なんです。需要と供給で売れる・売るの発想なんです。壺屋に窯を作ったのは。もう一つあるのは、壺屋に荒焼の原料はあったわけなんです。与儀公園のあの辺は全部ターブック（田圃）で、全部土だったんです。それがそっくり荒焼の土に使えたんです。これを田土と呼んだりするんですけど。田土が原料になったんです。そういうこともあって、王府は今でもここが、この跡が工房なんです。僕が首里に窯を作った頃までここに習いに来ました。宜保次郎さんのようないろんな先輩達がいて。ちょうどこの跡で長い背の低い仕事場がありました。薄暗い中で、荒焼の仕事をしていました。そういう時代がついこの間のことなんです。それが今みたいな近代ビルになって、跡形もない。もう綺麗に文化は消えましたね。そのままほっとくともっと消えますよ。あったということも分からないかも知れない。もう取り戻せないですねそうなると。今ならこうして若いころ、見たり聞いたり経験している人が、まだいるからいいんだけども。それがもう僕の世代が皆終わると、「えっ！沖縄でもやっていたの？」ぐらいになるかも知れないですよ。最近アメリカあたりで、ちょっとレクチャーしたことがあるんですけれど。そこで感じることは、これこんな調子でいくと、日本の若者達が登窯の勉強に、アメリカへ行くようになるかも知れないなというような感じがするくらい、向こうではジャパ

ニーズブームです。和食ブームです。肥満解消ブームです。日本は今肥満一になったみたいですね世界で。それで大腸癌なんかもトップらしいですね。だから食文化とか、そういう文化のことが如何に消えたかということですよ。（話が）横に走った方がもっと面白いんだけど、どうも今日は八重山に絞ってということだから。とにかく八重山すごいです。これから可能性として、あれだけ原料があるんだから。それともう一つ、パナリと言うのがあるでしょ。もうパナリにははまりました。十年、もっと通いました。如何せん、僕はものをあまり書いたり出来ない方だから、記録としてはあまり残らないですね。また、残したくもないけど。人を残したいね、作れる職人を。職人が文化は継承するって言うのかな技術は。学問が継承するって言うのはあまり聞かないですね。あれは参考にはなるんですよ。記録とかそういう研究掘り起こしって言うのは。ところが、文化を継承して行くのは作り手ですね。そこを誤ると、しかも需要と供給で捉えないと、文化は残らないですね。いくら偉い人が作っても、需要がなければこれは消えますね。それを行政にいる人達ももっと考えないと、文化政策を。こんどの選挙なんか文化の文もないですね政策の中に。あっちもこっちも文化の文もないですね。こんな時代になりましたね。あるのは皆金の話だけ。僕は文化が消えるのは急激と思います。そういうことをほったらかしておくと。そういうことも含めて今度の展示会は、良い物が作られていたあの時代に目を向けて頂きたいなと、そういう思いです。

以下は、講座参加者の質問に対する大嶺氏の答えを一部抜粋して記録したものである。

質問：高台の処理の仕方（エッジ部分の切り取り方）で湧田系、壺屋系に違いがあるのですか。

答え：こういう細かい技術というのは、物作る側からいうと陶工達の好みもある。いっぱい並べて統計で出すとそう言うこともあるけれど、一・二個見てこの削りはどうとかはちょっと言えないんじゃないかな。僕なんかも気分によってすごくいいものが作りたくて向かうけれども、気分によっては丸く削ったりとか、一・二点では決め手にならないかも知れない。できたら窯跡から陶片が出て来て、それを並べると答えは掴めるかも知れない。あまり早急に答えは出さない方がいい。あまり早急に出すと後が困る。答えはなるべく大きくしておいた方が、いいものが見えてくるかも知れない。そう言う意味ではこの様な話し合いを繰り返して、いろんな意見も出してプロで収集している人達も交えてやった方がいいです。ただ、残念なことに作り手は古くから、もの書いたりするジンブンは無いみたいです。記録に残っているのは殆ど（ものを書く）側から見た記録が多く残っている。作る側からそれを見たり読んだりすると、当たらないですね。非常に最近学者不審になってきました。だから、文化を継承するのは、これは技術だと思う。そして需要と供給で、産業の立場で作って行くことだと思う。そういう結論に今達しつつあるんです、仮説ですけど。でも天才みたいなのが出て来て、作らなくても見える評論家

もいるかも知れない。まあ！いないと思うけど。どこかに間違いを犯す可能性が強いですね。

質問：今回の（八重山）古陶展には大きな作品がないのですが。

答え：本当はあるんです。僕なんか70年代・80年代（八重山に）行き来して見たのは、大物が逆に多かった。骨董という感覚からすると、小さい物が好みに合うのかも知れない。ところが当時は大きい物が主流なんです、産業では。生活の中でも、水甕・穀物その他、漬物・お酒、大物なんです。だから八重山の大物はいっぱいあるんです。焼き締めで荒焼という、誰が呼んだか知らないけれど。僕は荒焼という言葉はあまり好きじゃないけれど。上手物の反対側にある焼き締めの焼物があるでしょ。種類を大雑把に挙げても、壺屋の南蛮という荒焼、喜名・知花という荒焼があるでしょ。それから宮良と今まで呼んできている八重山の荒焼があるでしょ。大雑把にすると少し釉は掛っているけれども、古我地の大物があるでしょ。それからするとあの当時は、今みたいにポリバケツとかステンのタンクとか全くない時代ですから、大物があるんです。例えば首里城の消火用水に使われた壺、藍壺よりも大きいんです。そういうものも焼いていたんです。八重山の需要がどういうものだったかによってその種類が分かってきますよ。必要なものは全部作っているんです。これが王府の産業だったわけです。

質問：八重山に大量に埋蔵されているといわれる木節に近い良質の土は、市役所から採集してはいけないというお達しがあるようですが、それと先生の物作りを督励する話とは整合しない部分がありますが、この点はどうクリアしたらよいのでしょうか。

答え：これは行政の貧弱さだろうね。こんなことやっていると、沖縄の産業なんて出てこないですよ。これは県も金がなかったら国の金を動かしてでも、こういうのはプロジェクトとして立ち上げるべきだと思います。これから正にそういう時代に今向かいつつあるから。

質問：湧田マカイといわれていたものが、八重山でも焼かれていたかも知れないということですが。メーガニクのような耐火度の強い土がなくても、八重山の土でも私達が思っている湧田のマカイのようなものが焼けるのでしょうか。

答え：今それが決め手になって、素地の締まり方とか重さとかで分類している節があるんだけど。全くメーガニクというようなカオリン系の土が無いとは言えない。あれだけ原料の土があるのだから。本島で言うと、だいたい恩納村の前兼久そこらあたりから以北、辺土名の先までメーガニク層なんです。非常に多いんです。本土で焼物をやっている人達が羨ましがるくらい良いメーガニクですね。それを混ぜると益子参考館に並んでいたような、本当に良い物が作れる可能性があります。

質問：八重山も探せばメーガニクのような土があるかも知れないですか。

答え：それは、あると思います。近いのは見たことがある。そんなこと言ったら壺屋の人に怒

られるけど。土漁りをしたから分かるんで、前兼久だけから出ると思われていたんです。それでメーガニクという名前が付いたんです。ところがそれよりももっと良質なものが、北部の方に一大層を成してあります。これは地学の先生にも頼んでいるけど、どういう来方でこのメーガニクの層が出来たのか。花崗岩の風化物とは別の出来方みたいです。釉薬学者のオオニシ先生（京都の芸大の非常勤）を呼んだりして一度（八重山に）入ったんだけども、見つかりませんでしたね。もしそういうものがあって、まっ！運んでもいいじゃないですか、これだけあるんですから。運んでもっと軽く作ると、この湧田系の仕事だけでも一大産業になると僕は見ています。

質問：沖縄本島では磁土は採れないのですか。

答え：琉球大学の地学で見ると、花崗岩が今のブセナから約陸地に 200m くらい入ってるんだってね、地下で。沖縄で一番面白いのはあの辺の土です。県が第三セクターで開発して、その後ブセナの本丸作ったでしょ。あれは焼物産業で言うと一大損失です。あの山全部使えなくなったんです。一番土が良いんですあれは。しかも残念なことに、海に向かって入っているんです。もっと隆起すると将来いいですよ。だから一千年後まで生きたほうがいいですよ。（客席から笑い）

質問：「陶工家譜」などに白焼物と出てきますが、磁器と白焼物との土の違いは何ですか。

答え：今は温度でも陶器より低火度で焼く磁器だってあるんです。だから土も白土で温度にさえ耐えられたら、磁器ができるんです。必ず陶石を砕いて有田がやったように、良質はあれなんですよ。ところが磁器と言う範囲が非常に広くて、陶器以外皆磁器なんです。そこで皆アバウトで仕事をしているんです。出来ないことはない。上質は固形化した陶石なんですね。陶石に磁土を作るときは、長石をパーセンテージで、好みで（混ぜる）。

質問：長石釉と言うものは沖縄のいろんな窯で使っているのですか。

答え：沖縄では、グシチャンが長石と言われている。グシチャンは長石分が非常に多いです、異物も入っているけど。メーカーが作る志野とか焼けるような長石ではないけれども。グシチャンが結構長石扱いしている。昔は髪を洗ったり、磨き砂に使ったりしました。グシチャンと呼んでいますよ。砂っぽい、あれが長石なんです。だから長石釉に近いものは作れる。もっと質のいいものが八重山にあるんです、長石が。タンパンと呼んだりします。

質問：八重山の土は発掘して、民業で使うことは可能なんですか。

答え：復帰の時点で本土の大手が、鉱業権で押さえたんです。ぼんやりしている間に全部押さえられたんです。それで使おうとしたら、全くだめ。それで裁判にかけてまだ解決していないんじゃないかな。あれは触れないんです。金を払わされるんです。皆まずいことしているんです。産業興しに真剣になっていないと思います。どう言うのが産業かと言うことです。宝の持ち腐れですよ。すごい土ですよ。原土と言うのは白土でも、自然の

適度な水分を含んでいるんです。掘り出してあげるから乾燥して変な物になるんです。地球の中に埋まっているときは、これはロースみたいなものです。ショベルを入れると、ねっとり起こってくるんです。

質問：展示作品の中で喜名焼と言われている瓶子に掛かる茶色の土は辰砂と聞いたのですが。

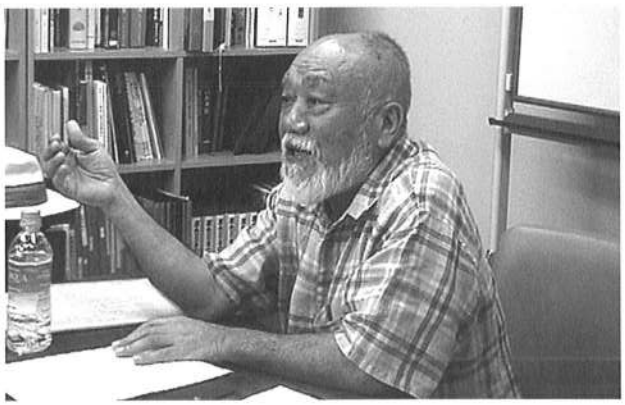
答え：辰砂と言うのは釉薬に酸化銅、銅分が入っているかいないかで出るんです。入っていたらそれを還元させる、酸欠をおこしている場所にあったら赤い辰砂になります。鉄砂も同じで、鉄釉が極度な酸欠をおこすと鉄砂に変わります。

質問：あの瓶子は辰砂が酸化したのであのような赤い色になったのですか。

答え：恐らく。オオグスヤーが掛っています。オオグスヤーと言うのは釉の調合で酸化銅が入るんです。銅分が入るんです、若干。零点何パーセントくらいだけど。それが若干入ることで、ああいう風に変化する。それを窯変と言いますね。オオグスヤーは面白いですよ。織部のオオグスヤーとは違うんです。織部は酸化銅一点張りで高火度だけど。奈良三彩とか唐三彩とは別のものなんです。織部がどこで高火度の緑釉に出会ったかと言う課題は一つなんです。加藤卓男さんのテーマはそれでしたね。安南とか琉球を通して伝わっている感じがすると彼は言っていました。沖縄のオオグスヤーと言うのは、酸化銅ではなくて、真鍮鋼を使うんです、真鍮の粉。真鍮も銅分が入っているからそれを利用して。酸化銅と真鍮のオオグスヤーはどう違うかと言うと、酸化銅一点張りの織部は透明感が強い。どんなに分厚く掛けても透明感が強いんです。ところが琉球の真鍮のオオグスヤーは不透明。だから、琉球青磁と言う言葉があるのはそれなんです。青磁風になるんです、特に分厚く掛けたりすると。それが酸欠おこすと赤くなったり変化をおこすんです。

文化講座の様子

展示の様子



大嶺實清氏